

川崎病

? どんな病気なの?

川崎病の正式名称は「急性熱性皮膚粘膜リンパ腺症候群」といい、全身の血管が炎症を起こす病気です。1歳~4歳の子どもを中心に発症し、特に1歳前後の赤ちゃんに多くみられます。未だに原因不明の病気ですが、治療法は確立しています。

女の子よりも
男の子の方が
多く発症



川崎病の特徴

かかりやすい
年齢

1~4歳

? どんな症状がでるの?

38度以上の高熱が5日以上続き、目の充血や唇の腫れ、手足のむくみが出て、全身に赤い発疹が現れます。また血管の炎症が引き金となり、発症した子どもの約10%の確率で心臓の冠動脈に瘤ができます。この「かんどうみゃくりゅう冠動脈瘤」を発症させないためにも早期の治療が求められます。

具体的な症状 ▶▶

川崎病

？ どんな症状がでるの？

川崎病にみられる症状

- ☐ 高熱が5日以上続く
- ☐ 手足の指がパンパンに腫れる、
もしくは手のひらや足の裏が赤くなる
- ☐ 唇が赤くなり、舌の表面に
イチゴ状の赤いブツブツした
発疹（イチゴ舌）が出る
- ☐ 首のリンパ節が腫れる
- ☐ 白目が赤く充血している
- ☐ 体全身に赤い発疹が出る
- ☐ BCG 接種部分が赤くなる

症状が
5つ以上該当したら
川崎病の疑いが！



！ 合併症にも要注意！

川崎病を発症すると、心臓に栄養や酸素を送る冠動脈が炎症し続けるため、血管の壁がもろくなります。このもろくなった血管が血圧に負け、瘤状の膨らみができます。この瘤は熱などの症状が改善しても残ったままで、この中に血栓ができると心筋梗塞を引き起こす場合があります。

早期治療で
合併症を防ぐ！



！ 治療法

川崎病の治療は、炎症を抑えて毒素を中和し、リンパ球や血小板の働きを抑える免疫グロブリン大量療法が一般的です。冠動脈瘤は発症後1～2週間してから大きくなるので、入院期間は2～3週間ほどかかります。症状が軽度の場合は、血管の炎症を抑えて血液が固まるのを防ぎ、血栓を予防するアスピリン療法が用いられます。どちらも冠動脈瘤を発症させないことが治療の目的です。

入院治療後も
定期的な検査が
必要



！ 退院後の検査と経過観察

冠動脈瘤が発症していない場合

症状が治まっても2～3カ月はアスピリンが投与され、年に1回は心エコー検査を行います。5年間は経過観察し、問題がなければ薬の服用もやめられます。

冠動脈瘤が発症した場合

冠動脈瘤が小さくなるまでは血栓を防ぐための薬を飲み続ける必要があります。約1カ月ごとに心電図、心エコー検査を行い、冠動脈瘤が大きいようであれば冠動脈造影（カテーテル検査）を行うことも。